「男、突っ走る！」

第5回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（16）	中央高校1年2組生徒
木内	孝志	（45）	雅也の父
木内	真保	（43）	雅也の母
門野	賢哉	（16）	中央高校1年2組生徒
木本	駿	（16）	中央高校1年2組生徒
濱口	寧々	（16）	中央高校1年2組生徒
田崎	良樹	（16）	中央高校1年2組生徒
山辺	一磨	（16）	中央高校1年2組生徒
志田	悠喜	（16）	中央高校1年2組生徒
宮田	春奈	（16）	中央高校1年5組生徒
鬼頭	美彩	（16）	中央高校1年6組生徒
五十川	孝之	（16）	中央高校1年6組生徒
尾形	安代	（52）	中央高校1年2組担任

1　中央高校・全景（朝）

セミの声が鳴り響いている。

2　同・1年2組教室

雅也が教室に入ってくる。

雅也「おはよう（と席に座る）」

瞬「うっちー、おはよう」

雅也「夏休みの宿題は、どう？」

瞬「もう少しで終わるよ」

雅也「やっぱり、夏休み最後まで宿題残っちゃうよね」

瞬「あと一週間で夏休みも終わりかー」

雅也「俺も、いつになったら学級代表代理を終えれるんだろ」

と、寧々がやってくると、

寧々「なあ、代理」

雅也「やめろ、その言い方」

寧々「だって似合ってるんだもん」

雅也「（部屋を見通して）今日も来てないところ見ると、まだ謹慎解けてないのかな」

寧々「そうじゃないの。まあ、いつ復帰しよ
が私には関係ないけど」
雅也「本当に男子と女子の壁があるよね、こ
のクラスって。もう二学期始まるんだから、
仲良くやってよ」
寧々「お、学級代表代理らしい言葉だね」
雅也「（呆れて）だから、濱口……」
寧々「まあ、木内のほうが学級代表は向いて
ると思うけどね」
雅也「みんなそうやって言うんだから……」
寧々「だって本当にそう思ってるんだもん」
と、席に戻っていく。
雅也「全く、勝手なばっか言っちゃって」
瞬「でも、俺もそう思うよ」
雅也「きのしゅん……」
と、賢哉が登校してくる。
賢哉「ちーす」
雅也「おはよう」
賢哉「転部届、出してきた」
瞬「え？」

雅也「かどけん、本当に部活変えるんだ」
瞬「何部？」
賢哉「コンピュータ部」
瞬「コンピュータ部？」
雅也「検定勉強するんだって」
賢哉「木内に教えてもらう」
雅也「今日、昼から部活あるけど、来る？」
賢哉「ああ」
雅也「よし、じゃあ今日からコンピュータ部として、よろしく」
大きくうなずく賢哉。

3　同・コンピュータ室

参考書を見ながら、パソコンに文字を打っている雅也――隣の席でその様子を見ている賢哉。
賢哉「普段の授業でも情報の勉強やってるのに、よくやってるよな」
雅也「ほら、かどけんもテキスト開いて、まずはできるところから、やってごらん」

賢哉「おお」

と、テキストを開いて、不慣れながらもパソコン作業をしていく――その様子を微笑ましく見てる雅也。

と、後ろのほうの席に座っている部員・宮田春奈（16）と鬼頭美彩（16）が、

春奈「木内君」

美彩「ちょっと来て」

と、春奈と美彩の席に来る雅也。

雅也「どうしたの？　宮田さんと鬼頭さんも二人そろって」

春奈「（テキストを見せて）ねえ、このボタンってどこにある？」

雅也「（テキストを見て）ああ、これね。パンテーンのボタンは、ここにあるよ」

と、笑いあう春奈と美彩。

雅也「どうしたの？」

美彩「木内君、今パンテーンって言ったよ。パーセンテージのこと」

雅也「え、そんな風に言った？」

美彩「うん」
雅也「シャンプーじゃん」
と、笑い合う雅也、春奈、美彩。
N「コンピュータ部の同級生、宮田春奈さんと鬼頭美彩さん。彼女たちはそれぞれ一年五組と一年六組で、授業もかぶることはなく、部活の時でしか顔を合わせていません。ですが、今はお互いに検定勉強に向けて頑張っている大事な仲間なのです」
と、部員・五十川孝之（16）が入ってくる――賢哉、孝之を見て、
賢哉「よ、五十川」
孝之「（驚いて）え、かどけん？」
木内「そっか、二人とも同じ中学校か。（孝之に）かどけん、今日からコンピュータ部に転部してきたの」
孝之「そうなの？」
賢哉「よろしくな」
孝之「大歓迎だよ」
美彩「（孝之を見て）五十川、ちょっと来て」

孝之「はいはい、行きまーす」

賢哉「（雅也に）あの女たちは、何者だ？」

雅也「言い方……（と苦笑して）鬼頭さんは、五十川君と同じ六組なの。だからいつもクラスでもああいう感じらしいよ。隣の宮田さんは五組だけど、ほら五組と六組は進学クラスでしょ。だから合同授業もあるみたいで、普段でも親交があるみたい」

賢哉「へえ」

と、五十嵐と美彩が談笑しているのを見ている雅也。

N「コンピュータ部の同級生である五十川孝之君は、かどけんと同じ中学同士で当時からお互いをよく知っている仲だったそうです。僕の勝手な予想ですが、当時の五十川君が、今の僕と同じようなポジションにいたのではないかと思っています」

4　木内家・全景（夜）

5　同・雅也の部屋

雅也がテキストとパソコンを交互に見ながら勉強をしている――と、ノック音がし、真保がお茶を持ってくる。

真保「あら、検定勉強」

雅也「うん。来月末だからさ、検定」

真保「はいお茶」

雅也「ありがとう」

真保「さっき、父さんから電話があった」

雅也「（振り向いて）何だって？」

真保「福岡の単身赴任だけど、満期の七年に決まったって」

雅也「じゃあ……」

真保「こっちに帰ってくるのは、あと二年後ってこと」

雅也「まあ、しょうがないだろ。健には言ったの？」

真保「うん」

雅也「何だって？」

真保「あの子も、心の成長してるのね。大丈

夫だって言ってたわ」
雅也「そっか。あと二年後ってことは、健は中二ってことだよね」
真保「そうね」
雅也「父さんが福岡に行ったのが、あいつが小学校一年の夏。帰ってくる頃には、中学二年になってるなんて、長いような短いようなな」
真保「あんたにも、しばらく迷惑かけるわね」
雅也「別に。（と苦笑すると）検定だってタダじゃないんだもん。受験料払う以上は、ちゃんと合格しないとね」
真保「プレッシャーに感じてる？」
雅也「全然。受験する以上、どうせなら合格したいって思うのは当然でしょ」
真保「そうね。けど、あまり無理しちゃダメよ」
雅也「うん」
真保「じゃ、先に寝るから。洗濯だけよろしくね」

雅也「分かった」

と、出ていく真保――背伸びをして、再び勉強を始める雅也。と、賢哉からの着信がある。

雅也「もしもし、かどけん？　どうしたの」

賢哉の声「今、まだ新宿でさ。これから夜行バスで名古屋帰るから、明日遅刻するって安代に言っといて。適当に理由つけて」

雅也「（苦笑して）分かった、伝えとくね。じゃあ（と電話を切る）」

6　中央高校・全景（朝）

7　同・1年2組教室

安代が教壇に立っている――雅也の号令に合わせて動く生徒たち。

雅也「起立。礼。おはようございます」

安代「はい、おはようございます」

雅也「着席」

と、一同座る。

安代「あれ、門田君は？」
雅也「本人から連絡があって、体調不良で遅刻するそうです」
安代「そういうことは、ちゃんと本人が学校に電話しないと」
雅也「僕もすごくそれは思います」
苦笑している一同。
N「新学期が始まりました。二学期になって三日が経ってから、光岡君も謹慎から復帰し、僕の学級代表代理という思いがけない役職も御役御免となったのです」

8　同・コンピュータ室

雅也、賢哉、美彩、春奈、孝之、他部員たちがパソコンで作業をしている。
美彩「ねえ、パンテーンちょっと来て」
雅也「（美彩と春奈の席へ行き）どうした？」
美彩「（パソコン画面を指して）こうなっちゃうんだけどさ……」
雅也「ああ、これはね……（とパソコン操作

をする）」
春奈「パンテーン、ここが分からないんだけど」
雅也「ああ、これはね……えっと、どうやるんだっけ。（と孝之に）ねえ、五十川君」
孝之「何？」
雅也「（パソコン画面を指して）ここって、どうだったっけ？」
孝之「これはですね、ここを押すとできますよ」
雅也「ああ、そうだ。ありがとう」
孝之「いえいえ」
と、席に戻る雅也。
賢哉「なあ、いつの間にパンテーンって言われるようになったんだよ」
雅也「夏休みに、パーセンテージのことをパンテーンって間違えたでしょ。あの次の日から」
賢哉「また新しいニックネームが増えたわけだ」

雅也「そうだね。あんな小さなミス一つでニックネームにしちゃうんだもん、女子ってすごいわ」

賢哉「お前、どっちがタイプ？」

雅也「は？」

賢哉「あの女子二人、どっちがタイプ？」

雅也「え、全く意識してなかった」

賢哉「つまんねえの」

雅也「そういう無駄口叩く暇があったら、検定勉強するの。こればかりは厳しくいくからね」

賢哉「そんなムキにならなくても良いじゃないか」

雅也「別にムキになってないし」

口をとがらせている雅也。

9　木内家・全景（夕）

10　同・居間

真保が携帯電話で話している。

真保「雅も健も大丈夫だって言ってるけど、内心はどう思ってるか……こっちだって家計やりくりするの大変なのよ。雅なんて、受験料払ってる以上は検定にはちゃんと合格しなきゃって思ってるみたいだしさ……そんな変なプレッシャー、あの子にかけさせたくないのよ。期間、短くできないの？」

11　福岡・工場・駐車場

車の中で、携帯電話で話している孝志。

孝志「もう会社で決まったことなんだよ。今更断れるわけないだろ。もう二年もすれば、そっちに帰れるんだからさ」

12　木内家・居間

真保「もう二年って言うけどね、あの子たちの二年っていうのは大きいの。雅なんて二年経てば高校三年生だし、健は中学二年になってるんだよ。二人とも将来のために進

路を考える大事な時期なのに、うちに父親がいないんじゃどうしたら良いって言うの」

13　福岡・工場・駐車場

孝志「将来っていうけど、あいつらの好きなようにさせてやったら良いじゃないか。俺たちが、あいつらに何かをさせてやりたいっていうのも特にないだろ」

真保の声「それは、まあそうだけどさ……」

孝志「だったら、あまり気にするな。そりゃ、家計のやりくりは大変かもしれないけどさ、特に大学に行きたいとかっていう話もしてないんだろ？」

14　木内家・居間

真保「まあ、雅も健も別に大学に行きたいようなことは言ってないし、大学に行きたかったら今の高校には行ってないと思う。基本就職がメインの学校みたいだから」

孝志の声「じゃあ、それで良いじゃないか。雅も健も、自分の世界を持ってるんだ。あいつらの好きなようにさせてやれよ。俺、今からアパート帰るから。じゃあな」

と、電話が切れる――真保、不満そうな顔をして、

真保「何よ。こっちがどんな思いでやりくりしてるかも知らないで……本当に自分勝手なんだから……」

と、大きなため息をつく。

15　中央高校・全景（朝）

16　同・1年6組教室～廊下

孝之と美彩が、友人たちと話している――と、隣の教室から春奈がやってくる。

春奈「五十川、美彩。ちょっと良い？」

孝之「どうしたの宮田さん」

春奈「検定勉強、どう？」

美彩「全然わかんない」
孝之「僕は大丈夫ですよ」
春奈「ちょっと不安でさ」
美彩「分かる」
春奈「どっかで時間作って、検定勉強でもしない？」
美彩「良いかもね」
春奈「五十川も来るよね？」
孝之「もちろんです」
美彩「パンテーンも呼ぼうよ」
春奈「そうだね。私から連絡しとく」
孝之「早めに連絡しといたほうが良いかもしれませんよ」
春奈「どうして？」
孝之「木内君は二組なんだから。みんな検定勉強に追われて、一緒に勉強しようって声かけられてるに決まってますよ」
美彩「確かにそれはあるかもね」
春奈「私、直接聞いてこようかな」
美彩「それが良いと思うよ」

春奈「うん、そうする」

17　同・1年2組教室

雅也、良樹、一磨が参考書を見ながら話している。

良樹「これぐらいだったら、俺たち検定行けそうだな」

一磨「だな」

雅也「分からないよ、どんな引っ掛け問題が来るか分からないんだもの、油断は禁物だよ」

良樹「木内だったら、ノーベンでも行けるだろ」

雅也「とんでもない。技術面は確かにノーベンでも何とかなるかもしれないけど、筆記試験なんていくら選択問題って言っても、似たような言葉がたくさんあるからね。さすがに勉強しておかないと」

一磨「へえ、木内でもやっぱり勉強するんだ」

雅也「当たり前じゃん。正直、内容見て飛び

級で二級の試験受けようと思ったけど、さすがにそれはリスクあると思ってやめたもん」

一磨「木内だったら、二級も余裕で行けるんじゃないの？」

雅也「どうだろうねぇ」

と、賢哉が声をかけてくる。

賢哉「おい、木内。ちょっと良いか」

雅也「うん。（と良樹たちに）ちょっとごめんね。（と賢哉のもとへ行くと）どうしたの？」

賢哉「俺、検定受けるのやめろうかな」

雅也「どうして？　検定料だって払っちゃったでしょ」

賢哉「けど二千円だろ」

雅也「二千円だって、ちゃんと払ってるんだもの受けるだけ受けてみたら」

賢哉「そうかなぁ……」

雅也「まあ授業の流れで、半強制的にうちらのクラスは検定受ける感じになってるから、やる気が起きないかどけんの気持ちも

分からなくはないけど。でもさ、やれるだけのことは、やってみたら？　俺もちゃんと教えれるところは教えてあげるから」

賢哉「……だな。そうするよ」

雅也「そうこなくっちゃ」

と、悠喜が入ってくる。

悠喜「木内、廊下で春奈が待ってるぞ」

雅也「春奈って……あ、宮田さん？」

悠喜「パンテーン呼んでくれって言われて」

雅也「志田と宮田さんって接点あった？」

悠喜「おなちゅうだもん」

雅也「そうなんだ」

悠喜「お前パンテーンって呼ばれてるのか？」

雅也「（苦笑して）まあね。これにはいろいろと事情が。ちょっと行ってくるわ」

と、廊下へ出ていく。

18　同・廊下

雅也と春奈が話している。

雅也「俺で良ければ全然良いけど」

春奈「良かった、ありがとう。パンテーン二組だから、同じクラスの子と検定勉強するんじゃないかと思ってさ、早めに言っとこうと思って」

雅也「ちゃんと時間作るから大丈夫だって。五十川君たちにもそう伝えといて」

春奈「分かった」

雅也「よろしく」

と、去っていく春奈――見送る雅也。

N「高校生活が始まって、まもなく半年が経とうとしていました。クラスに部活と、充実した学校生活を送っている中で、今はとにかく、周りの友達と共に検定勉強に勤しむことだけを考えていたのでした」

つづく